

リレー随筆

僕の鹿児島

今村総合病院 伊井 誠

桜島の上の青空を眺める度に、一人の特攻隊員が書いた遺書を思い出します。

「僕はもう、お母さんの顔を見られなくなるかもしれない。お母さん、良く顔を見せてください。しかし、僕は何にもカタミを残したくないんです。10年も20年も過ぎてから、カタミを見てお母さんを泣かせるからです。お母さん、僕が郡山を去る日、自分の家の上空を飛びます。それが僕の別れのあいさつです。」

鹿児島の鹿屋基地から飛び立ち19歳で特攻戦死した茂木三郎少尉が書いたものです。僕は一時期、米国に住んでいたことがありました。ちょうどその頃に、イスラム過激派のテロ攻撃による世界貿易センタービル崩壊が起きました。米国では特攻隊員がテロリストと似たものとして認識をされていたことに非常に驚き、調べていくうちに会ったのが上記の遺書でした。以来、つらい時には日本にいる家族や仲間を思い出しながら、この遺書を幾度も読み返したものでした。人生の流れというのは本当に不思議なもので、偶然が重なり、宮崎出身の僕は、茂木少尉が最後の時を過ごした鹿児島で、初期研修をすることになりました。病院で働き始めてから後も、茂木少尉の遺書は、死にゆく患者さんの心の寂しさを代弁するものとして、頻りに思い出されるのです。

初期研修医として過ごす2年もあと数カ月で終わりを迎えます。先輩研修医の方々「2年目は1年目よりずっと時間の流れが速く、本当に『あっ』と言う間だよ」と教えてくれてはいましたが、想像以上だと感じています。研修医として、なんとかぎりぎりの低空飛行を続けながら、僕は患者さんに対して、今で

も「申し訳ないなあ」という気持ちを抱えています。特に、人生の最後を迎える患者さんたちに対してその気持ちは強いのです。この人たちの人生の最後を看取る主治医が、自分のようなでくの坊で良いわけがないだろうという思いがあるからです。しかしながら、でくの坊なりに目の前の患者さんの心だけは理解しようとはするわけです。その為に僕は、死の床にある患者さんの生きた日数を計算し - 80歳なら約29,000日という風に - 人生を巻き戻していきます。妻や夫に先立たれた日、親の遺骨を骨壺に納め静かに泣いた日、子が生まれ歓喜した日、誕生日や結婚式を皆に祝福された日、夢破れ泣いた日、夕日の美しさに見とれた日、両親に手を引かれて小学校へ入学した日、泥団子を作って喜んだ日、そうして、産声を上げ世界と初めて対面した日・・・想像をめぐらしていると、意識の朦朧とした目の前の患者さんの心が聞こえてくるような気がします。

僕には7歳の息子がいます。おんぶや肩車を沢山してあげるようにしていますが、息子の体もどんどん大きく、重くなってしまって、「この子にこうしてあげられるのも、後少ししかない。本当に速いもんだ・・・」としみじみとしてしまいます。息子は毎日、いろんなことを不思議そうに聞いてくるのですが、ある曇りの日には、雲の隙間から見える青空を指さし、「あの雲はなんで青いの？」と聞いてくるのです。僕は「本当にきれいな青い雲だね。世の中には不思議なことが沢山あるんだよ」と答えましたが、僕はこの子の情緒をどうやったら、大事に大事に育てていってあげることができるのだろうかと自問自答す

る毎日です。肩車をする僕に息子が言います。「ぼくが大きくなって、アパがおじいちゃんになったら、ぼくが肩車してあげる。」また、ある日はこんなことも言いました。「アパとアニャがおじいちゃんとおばあちゃんになったら、僕が二人をベビーカーに乗せて毎日お散歩させてあげる。」息子のやさしさに心が温かくなりながらも、時間の過ぎ去る速さをどうしても認識させられます。と、同時に、病院で死にそうな患者さんにもきっとこんな日々があったんだと考え、しみりとしてしまいます。

僕は漫画家の水木しげるさんが大好きなのですが、水木さんが小学2年生の頃、担任の先生が「人は誰しもが必ず死にます」といったのを聞いて、椅子から転げ落ちそうなくらいに驚いたそうです。それを引き合いに出して、鶴見俊輔さんは「彼の気持ちを、僕はすごく理解できるな。自分ももう87歳で、あと数年で死んでしまうのだけれど、幼い頃にもっていた、『いつまでも僕は生きる』という永遠の感覚は、小さなかげらとなって、今も自分の心の中に残っているね」と言いました。僕の息子も、人は死んだら空の上の世界に行き、大好きな人たちといつまでも一緒に暮らすことができると信じています。僕が7歳までそう信じていたように。

今年の春は一人で海に行きました。砂浜に座り、目の前に広がる海の音に耳をすまします。きれいな青空に、雲が所々浮いています。風が頬や腕を撫でていき、後ろの林からは、鳥のさえずりが聞こえてきます。波は太陽を反射して宝石のようにきらめいていました。あまりの気持ちよさに、「風こそは、信じ難いほど柔らかい、真の化石」という星野道夫さんの本に書いてあった言葉を思い出しました。「ああ、本当に今日は死ぬのもってこいの日だな」と思いました。そうして、もしも、今にも死にそうな患者さんのベッドを、ここに持ってくるのができたならば、ほと

んどの人が、自分が存在することの奇跡を感じ、人生を肯定して旅立つことができるだろうとさへ思ったのです。

夏には一人バスに乗り、知覧特攻平和会館を訪れました。記念館では、遺書を読んだ沢山の人が泣いていました。

数時間を過ごし記念館の外に出ると、沢山のセミの威勢の良い鳴き声が、青葉を茂らせた桜の木から聞こえてきました。近づくと、地面にはセミの穴がいくつもあいています。桜の青葉の隙間から漏れる日の光のまぶしさに目を細めながら、僕はかつて見たとても鮮明な木漏れ日の夢を思い出しました。先ほど見た血染めの日の丸や、千人針、沢山の遺書、特攻隊員の顔写真 悲しい歴史とは無関係に過ぎていく自然界の時間の流れと、かつての夢の記憶とが入り乱れて現実感がそぎ落とされ、僕はそこでしばらく呆然としていました。

そういえば、水木しげるさんは、南方熊楠さんの生涯を漫画にしています。漫画は読んだことはないですが、南方さんは死の床でこんな言葉を残して死んだそうです。「今、話しかけないでくれ、センダンの薄紫色の花が天井いっぱい咲いていて、とても気持ちいいんだ。」僕の人生最後の日も、朦朧とした意識の中で、知覧で見た木漏れ日や、あの夏の日の海のきらめきを臉の裏に映すことができればどんなにいいだろうかと考えます。息子を肩車しながら考えていた患者さんたちの事も、きっと思い出されるでしょう。医師人生の初期に出会った思い入れ深い患者さんたちですから。その時になり漸くわかるのだと思います「あの人たちはこんな気持ちだったんだな」と。

僕の人生の最後の瞬間に結び付く大切な記憶を作った場所 それが僕にとっての鹿児島です。

次号は、今村総合病院 黒岩俊志先生のご執筆です。  
(編集委員会)